

滿洲國熱河省の昆蟲界 III

岸 田 久 吉

(農林省農事試験場昆蟲部)

"Continued from Vol. 8, No. 2, p. 116."

4. 熱河省産のタマコロガシ

熱河省動物採集觀察の旅の始めから終まで、殆ど毎日見ることの出来た甲蟲は、實にタマコロガシであつた。熱河省のタマコロガシのことは歸朝以來方々で話したし、書いたもので印刷になつたのも二三に止まらぬ。併し、小生の筆になるもので、最もまとまつてゐるのは、次の一篇である。

岸田久吉—1934 April—熱河省のタマコロガシ甲蟲に就て—紀州動植物 Vol. 1, No. 1, pp. 4—9, 1 pl., 2 textfigs.

それに於ては 1) 滿洲産タマコロガシに 3 種あること、2) 熱河省にはオホタマコロガシ *Scarabaeus sacer* LINNAEUS とコタマコロガシ *Gymnopleurus pilularius* LINNAEUS の 2 種あること、3) 兩種の形と色、4) 兩種の分布と出現、5) 所謂タマをころがす習性の觀察を記しておいた。

タマコロガシが犬の血色スピロケルカ *Spirocerca sanguinolenta* の中間宿主であることは、奉天の小野定雄氏 (1929; 1932; 1933) の研究に依つて明らかになつた。

尙ほタマコロガシ 2 種の學名や記載は三輪勇四郎博士が、小生等の材料で、改めて報告を書いて下さる。

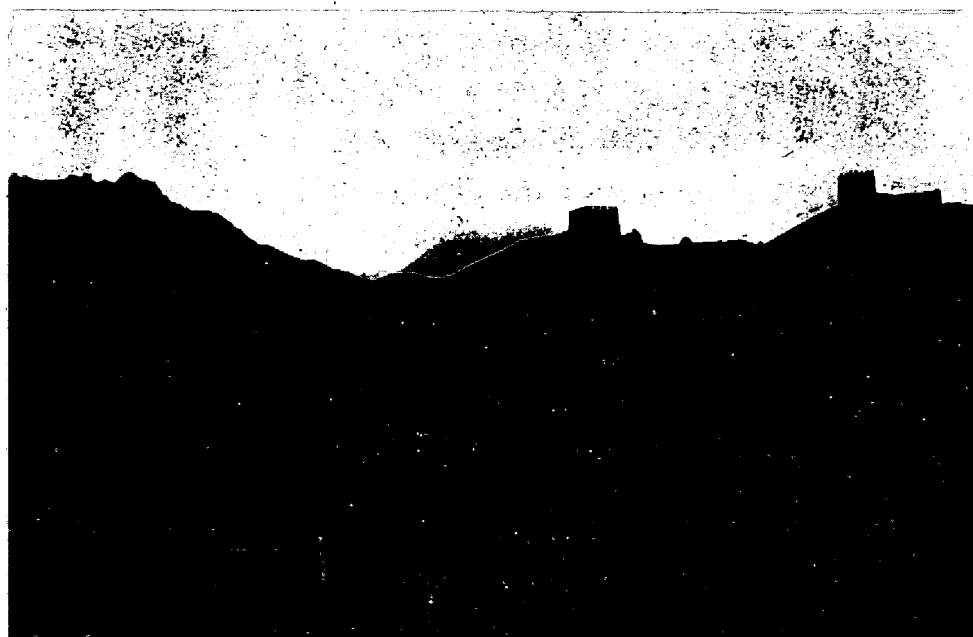
5. 熱河省産のテナウムシ

熱河省内の昆蟲界は直翅類を除くと、實に貧弱なものである。その點から見ると此地のテナウムシは存外豊富であると云得さうであつた。湯淺啓溫氏に見ていただいた結果によると、4 屬 6 種あつた。

日本と共通の種類は 4 屬 4 種である。1) オホニジフヤホシ即ちオホテナムシダマシ、湯淺氏は近來 *Epilachna vigintioctomaculata* MOTSHULSKY と云ふ、北隆館の日本昆蟲圖鑑のとはちがつた學名を用ひてゐられる。2) ジフシホシテナウムシ *Coccinella quatuordecimpustulata* LINNAEUS 3) テナウムシ即ちナミテ

ンタウ *Harmonia axyridis* PALLAS 4) ヒメカメノコテンタウ *Propylaea japonica* THUNBERG 此の4種でも、小生等のとつたのは存外日本で見て居る様には變化がなかつたが、ナミテンタウだけは一種類内の變化が多く、色型が頗る多様であつた。ジャガイモ畑や西瓜畑には普通の種類が多數にゐた。

珍しいものでは朝陽で採集したヒメボソテンタウ *Adonia variegata* GOEZE がある。従來歐洲・支那・シベリアから知れてゐた種類である。全長時には5 mm. を超えるが、まづ小さい方のもので、ジフシホシテンタウとは似た大きさである。但し、翅鞘は淡い褐黄色——灰褐又は濃茶褐色で、10—13 位の大小不整の黒點を散布してゐて、美しい。前胸背の白黒の斑紋は1疋以上同一型のもの



山の尾根を傳ふ萬里の長城（日光寫眞館寫）

が無いといつても可い位に、變異が賑かであつて、地と斑が主客てんたうして居るかと思はれるものもあるが、小生は勿論地を淡い黄白色と考へてゐる一人である。

それから内地のナナホシテンタウだらうと思つて採集したのが、歐洲から朝鮮にかけて棲息するコモンナナホシテンタウ *Coccinella septempunctata* LINNAEUS だとのことで、少年時代から暗記してゐた學名の主だつた。

6. 熱河省産のアカシタバハゴロモ

昭和8年9月6日 われ等生物學班は興隆を立つて萬里の長城を突破して、中華民國河北省の牆子路に泊つた。此の日の午飯をとつたところが泉嶺の西阪の茶店であつた。其所の崖に1本の大きなニハウルシ *Ailanthus altissima* SWINGLE, 1916 (此學名は特に北川政夫氏に教へていただいた) の木が大きな葉をつけて、日蔭を投げてゐた。此の木はシンジュとも云つて、元來支那原産として有名な庭樹である。その露出した横の根や根元にとまつて樹液を吸つてゐるビハハゴロモ類が多數に居た。見付た小生の喜は實に大きなもので、早速捕へてはエチルアルコールに浸した。大方採りつくした時分に、森爲三氏が駆けつけて、一疋残らずに集められた。今回の調査研究の旅で見た一番綺麗な昆蟲は、此のハゴロモであつた。小生は此にアカシタバハゴロモの名を與へた。大阪及東京の兩朝日に此名が出た筈であるし、方々でのお土産講演やラヂオ放送にも使つた。又今年の兩朝日のお正月記事にはスケッチも入れておいた。此の種の學名は小生の研究した所では *Lycorma iole* STAL, 1863 である。此によく似た *Lycorma delicatula* (WHITE, 1845) [sub: *Aphaena*] は天津のロシア公園に居ると云ふことで、ベニシタバハゴロモ又シタバベニハゴロモと云ふ和名で、大連の小林勝氏(1934)が満洲博物同好會々報 No. 4, p. 47 に書いてゐられる(種名は *delicotum* と誤植されてゐる)。併しながら、小生は自分の採つたものは前からの考説で、誤つてゐないと今も信じてゐる。兩種の區別は DISTANT, W. L. (1906, p. 207) によると 1) 大小、2) 頭部突出體、3) 兩翅の斑點の大小に在る様であるが、實はデスタント氏はスタール氏の *iole* の文中大切な句を見落してゐる。それは眼のためでない、頭腦のせいである。*iole* の方は wings coccineous, with 8—10 black spots, piceous behind the middle, and there with a shortened fascia green or bluish-green; anal valvules in female sanguineous. 此のイタリックの部分を楽しむことを要する。後翅の元の方の赤い所と端の黒と淡青の所との間に大きな黒斑が明らかに一つある。*delicatula* には此の黒斑が缺けてゐる。

因みに *iole* はストックホルム博物館所藏 “India orientalis” 産の標品から記載され、精確な産地の知れない種だつたので、其れが東部印度の外、熱河省にも分布してゐることが知れたのは學界のためによろこばしい。

7. 熱河省産のギス

小生のギスと云ふのは一般にキリギリスと書いてある種類である。現今の本のキリギリスは僉議をかさねる程、不都合の度を強める故、民間の俗稱をそのまゝ、小生はギスと呼ぶことにしたい。餘談はさておき、熱河省内で採集したり買ひとつたギスは次記の3属5種である。ギスは古くから小生が興味を有する所であるが、今回の採品は森爲三氏の手で整理されることになつたから、分類上の詳細は同氏の報文にたよらねばならぬが、小生は従來の諸家の報文に對しては實際あまり信用してゐない一人であることを公言しておく。

1) ハネナガギス *Gampsocleis ussuriensis* ADELUNG, 1910. 小生が通俗の文ではいつもマンシウキリギリスと呼んで來たものであつて、在滿鮮數人の諸君の同一和名のものとは全く別種である。熱河省では南北を通じてイネ科やカヤツリグサ科の叢にゐる。出現期の長いものである。♂は體長 30 mm. 前翅長 40 mm. ♀は體長 33 mm. 前翅長 40 mm. 産卵管 25 mm. 位を計る。東オ＝ユートの草原……等で 10 月上旬、初雪が來ると云ふのに、ヘリのすりれた翅をすりながら鳴いてゐるのは、哀愁を感じしめられた。

2) ホシコバネギス *Gampsocleis obscurus* (WALKER, 1869) [sub: *Decticus*] 朝陽と霧靈山彙で採集した。森爲三氏は古北口でも採つたと話しておられた。翅は腹よりは明かに短いけれども、併し短翅のギス中では相當に大きい方であるし、又珍しいことには前翅には紫褐色の脈條と小點があるので、他種とまぎれることが無い。少い種類である。♂は體長 35 mm. 前翅長 24 mm. ♀は體長 43 mm. 前翅長 25 mm. 産卵管 22 mm. ♀にケダ＝科の幼蟬をやどしたのがゐた。キリキリ……とつづけさまに鳴く。

3) コバネギス *Gampsocleis sedakovii* FISCHER DE WALDHEIM, 1846. 滿鮮在住 3—4 の諸君がマンシウキリギリスと書いてゐられる種類である。なるほど分布は全滿洲に亘つてゐるし、又熱河でも各地にゐる。併し、鳴聲が内地のギスとはちがふし、翅が非常に短いから、此和名は改稱すべきものである。故に小生は早くからコバネキリギリスと全く別の和名で呼んでゐた。♂の體長 43 mm. 前翅長 17 mm. ♀の體長 50 mm. 前翅長 11 mm. 産卵管 33 mm. 高粱の莖や葉を割つて挟み、いくらかも市場に賣つてゐる。

4) クロコバネギス *Atlanticus* (= *Amuria*) sp. 此属は面白い分布をしてゐ

るものとして、昆虫學者の注意してゐるものである。現在本種は分布が非常に極限されてゐるらしく、小生等は霧靈山麓の五岔溝で、夜間採集に多數採集したし、又長山峪から 10 km. 位東南の二道溝の山中でも可なりに採つた。前胸背が長大であり、前翅は小いが後外角に張つてゐる。前者の後方が淡い灰紫赤色、後者のへりが白く、體の下面が灰紅色である外、殆ど黒い。♂ の體長 27 mm. 前翅長 7 mm. ♀ の體長 25 mm. (前翅はかくれて見えぬ)、産卵管 20 mm.



二道溝（長山峪の東南）の山地（高橋基生氏寫）

5) ボテギス *Deracantha transversa* UVAROV, 1930. 小生がボテキリギリス、他の人々がオニキリギリス、ゴバネオホキリギリス、オホガタコバネキリギリス……等と云つてゐた種類である。從來 *Callimenes onos* (PALLAS) だの、*Deracantha onos* (PALLAS) だのと書いた人があつたけれ共、實は皆分類書を讀まぬ人の出鱈目であつた。兩性共、前胸背下にかくれた前翅の發音器で、存外美音を立てる。夜も晝も鳴くし、眞晝間に交尾しながら鳴いてゐることもある。エチルアルコールの坊間で所謂“純”なものへ浸しても、30 分位は鳴いてゐる。徳永重康博士は“それがほんとの悲鳴だ”としやれ口をきいてゐられた。興隆・

二道溝・炭局子・古北口……等で採集した。産地は鮮滿に亘つてゐると云ふが、各地の棲息箇所は存外極限された狭い所である様だ。それから小生は朝鮮産のものを木下周太氏・江口貢氏……等各位の御親切に依つて、精しくしらべたので、比べてみると殆ど同一種らしくはあるが、一體朝鮮産はほそく小くて、色が白つばいし、前胸背の兩側に1對しか小突起が無く、外稜は外曲性である。又♂の尾毛の針は後内端に出て居り、♀の尾毛はほそい針の分が砧の分と同長位もあり、亞生殖板の所の針は基半がひろく、一見して針が上曲性であるかの様である。之に反して、熱河産は長大で強く *piceous* であり黒つばいし、前胸背の兩側には2對の小突起を有し、外稜は殆ど並行である。それから♂の尾毛の針は後内端よりも遙かに前内方から出て居り、内縁の後方 $\frac{1}{3}$ に位する。♀の尾毛は短太くて、針は砧の $\frac{1}{2}$ あるかどうかと思ふ位で、甚しく短い。又、亞生殖板の所の針は端直であるし、ほそ長い。僅かの差異ではあるが、兎に角前記の通り明かに鑑別は出来る。専門のギス研究者だつたらきつと種類を分たれるであらう。♂の體長 50 mm. 前胸背の長さ 17 mm. 幅 13 mm. ♀の體長 62 mm. 前胸背の長さ 18 mm. 幅 14 mm. 産卵管 30 mm.

此のギスの巨漢に就ては、小生は分類や分布以外の研究や觀察を少しく有つて居るし、材料も新しいのを昭和9年中に受取る都合になつてゐるので、他に報告を書くつもりである。

ついでながら、前胸背の後下方發音器のある翅の前基部に寄生するダニがある。

8. 熱河省産のヒメバチ

ヒメバチ4屬4種が内田登一氏によつて査定された。

1) テウセンキベリアメバチ *Cremastus flavoorbitalis* CAMERON forma *coreanus* (UCHIDA, 1928) [sub: *Diasparsis*] 日本と滿洲の産。

2) ガルガハヒメバチ *Coelichneumon garugawensis* UCHIDA, 1925. 日本と滿洲の産。

3) エグトガリヒメバチ *Spilocryptus ramuli* UCHIDA, 1934. 今回朝陽から得た新種である。體長が 15 mm. 位もある頑丈な種類であつて、腹は飴色であるが他は黒い。

4) オホアメバチ *Ophion luteus* (LINNAEUS, 1758) [sub: *Ichneumon*] 北米

からアジア・歐洲をへて、アフリカまで分布してゐるもので、小生はそれを 2 疋、霧靈山中で採集した。唯のアメバチと思つてゐたら、その通りであつた。

9. 熱河省産のコバチ

熱河省の北半は半沙漠地帯であつて、そこにはカンゾウと云ふ甘味を取ることの出来るマメ科の半灌木が、ハナアカシアの様な葉をして、長いゴバウの様な根を地中にはつてゐる。小生等は 9 月下旬から 10 月上旬にかけて、その地帯を採集して歩いたので、莢を大分にもつて歸朝することが出来た。その中で



五文地の砂漠に生じ莢をつけてゐる甘草（高橋基生氏寫）

八木誠政博士におすそわけした分から、同氏がコバチを得られた。石井悌博士が査定されたところ學界未知のものと判明したのでカンゾウタネコバチ *Eurytoma yaghi* ISHII, 1934 と命名された。

此の外に蜂に寄生するアリヤドリコバチ *Schizaspidia* の 1 種を小生が採集して來た。それは石井氏の手で目下研究されてゐる。

10. 熱河省産のコマユバチ

カミキリに寄生するハネグロアカコマユバチ *Iphiaulax impostor* SCOPOLI, 1763 の成蟲を小生は五岔溝で採集した。本種は日本から歐洲にかけて廣く分布

してゐるものと云ふ。

やはり小生の捕蟲網に入つたもので、カモドキバチによく似たものがある。石井博士は之にキシダコマユバチ *Neorhogas kishidai* ISHII, 1934 と命名された。シャクトリムシの寄生蜂らしい。

11. 熱 河 省 産 の ア フ バ チ

熱河省の南半は見事な山岳地帯である。その部の採集中、小生は他の蜂に寄生するからと云ふので、アフラバチは十分氣をつけてゐたが、唯1疋しか採集出来なかつた。それが内田登一博士の査定によつてヨツバコアフラバチ *Chrysis ignita* (LINNAEUS, 1758) [sub: *Sphex*] だと云ふことがわかつた。小生は霧靈山彙中で採集したが、分布がひろく、日本からシベリア・中華民國・歐洲・アフリカにかけて棲息する。

12. 熱 河 省 産 の ハ ム シ

友人に子爵高木正得君あり、本郷の學生時代さかんに教育されたおかげで、ハムシにはすぐに氣が付く。今は若い湯淺啓溫氏が熱心に専攻されてゐるので、採集品の査定には何の手間暇かからなかつた。熱河標品は11屬13種である。

その中で日本にも居るのは2屬3種である。

1) ヨモギハムシ *Chrysomela aurichalcea* MANNERHEIM.

2) ハクカハムシ *Chrysomela exanthematica* WIEDERMANN. 此はハクカに限らず、オドリコサウ科の植物には廣くついてゐる。

3) ヨツボシハムシ *Luperodes quadriguttatus* MOTSCHULSKY. 此は凌源で、山にも畑にも川べりにも多く居た。

霧靈山彙内の五岔溝で小さい瑠璃色のハムシをヤマボウシの葉の若葉で採集した。それが2種を含み、甲がカミナリハムシ屬1品 *Haltica* sp. で、専門家を鳴かせて了つた。乙はムナグロルリマルノミハムシ *Nonarthra nigricolle* WEISE で、紡錘状の前胸背が前後の瑠璃色の部即ち頭と翅鞘の間に挟まつて、黒色をしてゐる。カミナリハムシの短廣なそして瑠璃色をした前胸背とはよく見れば判然と區別が出来る。

シベリア・蒙古・滿洲から知れてゐる *Pallasia abschinthii* (PALLAS) かつて土井久作氏 (1927) が公主嶺附近から得て發表されたムネボシアフラハムシ *Apophyllia thalassima* (FALDERMANN, 1835) [sub: *Auchenia*] が共に朝陽で採れた。

やはり朝陽での採集品にハクカハムシにまぎらはしい、翅鞘の中凸度の強い、大形のハムシが大小2種ある。更に黒くて斑點は無い。何でも *Crosita* 屬のものらしいと云ふことである。

承德の離宮での採集品には今回のハムシ中で最も偉大な種類を含んでゐる。それはトホシマルオホハムシ *Oides decempunctata* BILLBERG である。大きい個體は全長 15 mm. にも達する。全體褪せた黄色—褐黄色で、翅鞘にあらく 5 對位の丸い黒斑を装ふ。前胸背には 1 對の赤褐色—黒色の小點を示すものがある。朝鮮や中華民國ではブダウ類につく害蟲として知られてゐる。

朝陽や凌源で小生がスイバみたいな小草本から採集した頭が黒く、翅鞘が瑠璃色で、間の前胸背が赤い、全長 5 mm. 位の小さくほそいハムシは、歐洲産として知られた *Gastroidea polygoni* LINNAEUS ださうで、ムネアカタデハムシの和名をつけた。

以上の外、承德と灤平の間の双塔山で採集したオホハムシ *Galeruca Dahli* JOANNIS 朝陽産のスコポリハムシ *Coptocephala scopoliana* LINNAEUS の 2 種も、歐洲産としては既知の種類である。

13. 熱河省産のツチハンメウ

小生等の見たツチハンメウ科は唯 2 種きりであつたが、併し個體の数は却々多かつた。

上品な形で眞黒な色のは、日本にもゐるマメハンメウだらうと思つて朝陽や凌源から採つて來たが、河野廣道博士の査定によつて、テウセンクロマメハンメウ *Epicauta chinensis* MOTSCHULSKY, 1853 だとわかつた。

それから地色が淡茶な翅鞘に丸い黒點を 6 對前後もつて居り、頭・前胸背・歩脚が漆黒色を呈し、頭と前胸に長毛を生じてゐる種は、朝陽にも凌源にも極めて多くゐた。その體の大きさと翅鞘の斑紋は實に變化に富んでゐる。之も河野氏の査定によつて、マダラゲンセイ *Myliobris calida* (PALLAS, 1781) [sub: *Meloe*] であることが判明した。朝鮮・満洲・中華民國・ソビエツト聯邦・トルコ・歐洲南部・エジプト等に廣く分布してゐる種類である。

14. 熱河省産のシムデシ

シデムシの幼蟲は何疋も見つたが、名のわかる成蟲は東オニユート王府に滞在する間に唯 1 疋採集したきりであつた。そして小生は之を日本に普通のシデ

ムシ *Necrophorus japonicus* HAROLD と思つてゐたが、先程、河野氏の御研究によるとナミモンシデムシ *Necrophorus investigator* ZETTERSTEDT, 1824 である。

15. 熱河省産のザウムシ

ザウムシは熱河省ではいくらかも見なかつた。此類は河野博士の手で査定していただいて、すつかり判明した。4 属 4 種である。

朝陽や凌源では稀ではあるが、短吻であつて、黒くて、ほそ長い、中凸度の大きくて、くりくりした小さい種類がゐた。大きいものでも全長精々 7 mm. 位である。マルムネヘウタンザウムシ *Piazonias globulicollis* FALDERMANN, 1835 と云ふ名稱は實物に照合すると適稱である。満洲と北支の産である。



承德離宮の内庭の池（日光寫眞館寫）

承德には中庸の大きさ（體の全長 10 mm. 位）で、黒地乍らも殆ど灰色の短毛が密生するために、灰地に黒斑を有つかの様に見ちがへられるマンシウハスヂザウムシ *Pleurocleonus sollicitus* (GYLLENHAL, 1834) [sub: *Cleonus*] がゐた。之は東はアムーリアから西は歐蘇の中部までに廣く分布してゐる種類であつて、満洲各地に見出される。泊尙義氏 (1930) の關東州昆蟲目錄 (p. 41, No. 1) に松村松年氏がマンシウゾウムシと命名されたと出てゐるのが本種である。

突隆塘から北營房へ抜ける隘道子梁で、小生が一行からおくれて、馬賊村の上で汗を拭きながら、ヤシヤブシみたいな木から採集した眞黒な大形（♀ で體の全長 11.5 mm. 位）のザウムシは、附近に相當あるキク科のヤマボクチみたいな植物の害蟲であらうか。河野博士は日本のシラクモゴバウザウムシに似て非なるものとして、新たにキシダゴバウザウムシ *Larinus kishidai* KONO, 1934 と命名された。

素人眼にへんだと見えたのは、朝陽で小生の採つた一見淡青い短吻のザウムシで、♀ の體の全長 10 mm. 内外を算する。翅鞘の内後角が後方にはね出した點も目をひく。日本のオホアヲザウムシや朝鮮のアカアシオホアヲザウムシと似た別種ださうで、歩脚の腿端から先が紫赤色を淡く輝りはえるところから、バラアシオホアヲザウムシ *Chlorophanus roseipes* HELLER, 1930 と呼ばれることになった。

16. 熱 河 省 産 の ガ ム シ

昭和 8 年 8 月 21 日かと思ふ。森 爲三氏は承德離宮の池から 日本にいくらかもゐるガムシ *Hydrous acuminatus* (MOTSCHULSKY, 1853) [sub: *Hydrophilus*] を 1 疋採集された。此池の動物は植物と同様、頗る日本のものとよく似てゐるので、此もその一つと深く印象した。

8 月 27 日突隆塘から北營房への途上、相當こたえた隘道子梁の山上の冷泉で、體長 3 mm. 位の黒い小形のガムシを 2—3 疋採集した記憶がある。神谷一男氏にしらべていただいた所、日本にもゐるシジミガムシ *Laccobius bedeli* SHARP, 1884 だとのことである。

以上 2 種が山岳地帯の先づ清水産と云つてよいものである。半沙漠地帯では東オニユートから少しく離れた小河へ流れこむ牛馬の糞とソーダの水湛から 10 月 3 日に體長 5 mm. の黄褐色のガムシを採集した。小生はほしいままにオニユートガムシの假稱を與へた。神谷氏に従へば *Enochrus* 屬のものだと云ふ。今尙ほ種名は判明せぬ。

17. 熱 河 省 産 の ゲ ン ゴ ロ

昭和 8 年 9 月 12 日長山峪の東南の炭局子附近を採集した内に愉快な採品がある。西大嶺の山ふところに包まれた清冽な湧水の中に、ミズスマシの様に表面膜下を廻つたり、水底に靜止したりする、體長 10 mm. 内外のゲンゴロで

ある。神谷一男氏にしらべていただいたら、屬が *Agabus* であることまではわかつた。小生のノートにはミナカミゲンゴロの假稱を與へておいた。此の和名は廣島でのラジオでもさう放送しておいた。

8月30日興隆滞在中に採集した、體の全長 10 mm. 位のものは、ミナカミゲンゴロと同屬のもので、今回新名チャイロマメゲンゴロ *Agabus browni* KAMIYA, 1934 が與へられた。九州にも見付かつてゐたのだと云ふ。

森爲三氏が8月20日頃、承德離宮の池で採集されたのは體長 28 mm. 位の種類で、泊氏の目録 (p. 49, No. 2) にも出てゐる、日本ではよく知られてゐるコガタゲンゴロ *Cybister tripunctatus* (OLIVIER, 1795) [sub: *Dytiscus*] であつた。

以上3種が山岳地帯の清水に棲むゲンゴロである。北方の半沙漠地帯（主として東オニユート）で採集した種類は次の4種である。

1) ゲンゴロダマシ *Dytiscus marginalis* LINNAEUS, 1758. 體長 33 mm. 位。日本の北帯からシベリア・歐洲にゐる。

2) ハビイロゲンゴロ *Eretes sticticus* LINNAEUS, 1767. 體長 14 mm. 位。分布は甚だ廣い。

3) ヒメゲンゴロ *Rhantus pulverosus* STEPHENS, 1828. 體長 12 mm. 位。日本から北まはりに歐洲まで分布してゐる。

4) コシマケシゲンゴロ *Coelambus caspicus* (WEHNCKE, 1873) [sub: *Hydroporus*]. 體長 4 mm. 位。シベリアから北歐に分布してゐるものである。

18. 南滿洲及熱河省産のセミ

昭和8年7月27日 われ等一行が大連に着いた日の正午滿鐵總裁伯爵林博太郎氏の招宴に列したが、窓際の樹にワキジロミンミンが盛んに鳴いてゐた。翌日も翌々日も大連や旅順で、此のミンミンを聞いた。30日には熊岳城の農事試験場を參觀したが、秋山武雄氏から此地方産としてアブラゼミとワキジロミンミンの2種を見せていただいた。

熱河省に入つて以來セミには却々出會はない。8月25日に磚瓦窑から柴河口に至る旅をした。此の間、晝食をした撈凹と云ふ寒村でヒロハドロやアンズの樹上に、エゾゼミ様の鳴聲を聞き、その姿もほのかには觀たけれども、捕へることは出来なかつた。ミンミンも聲は聞いた。

撈凹でも柴河口でもノレやドロの木の高い所にクマゼミがレキレキ……

……と鳴きつづけてゐた。次の 26 日柴河口から突隆唐への途上、夾馬石や二道營子で、ミンミンを聞いた。

8 月 28 日は北營房から興隆への旅をした。此の途中で馬圈子の川岸で、高さ 5m. 許りもあるノニレの梢近くにあるクマゼミ 3 頭を採集した。最初採つたのは死んで居り、白い黴がついてゐた。所謂セミカビである。後の 2 足は生けるものであるが、之等はすべて銃で打つたのであるが、あまり體をいためずに採集出来た。レキレキと鳴くのがクマゼミであることは、實は此日になつて始めてたしかにわかつたのであつた。

9 月 6 日興隆から牆子路の間でもクマゼミを 3 ヶ所でたしかめた。1) 青石嶺の東方 2 km. 位の所。2) 泉嶺と九聖廟の間。3) 三道河子の西方 1 km. 位の所である。

9 月 7 日は中華民國河北省内の旅で、牆子路から石匣鎮までを歩いた。牆子路の西方 3—5 km. の所でもクマゼミやミンミンを見た。

ミンミンは土名でミンミンワーと云ふ。種類はたしかにワキジロミンミン即ち加藤正世氏のテウセンミンミンであつて、學名は *Oncotympana coreana* KATO, 1925 である。クマゼミは加藤氏の御研究に依つてスヂアカクマゼミ *Cryptotympana pustulata* (FABRICIUS, 1787) [sub: *Tettigonia*] と決定する。

エゾゼミは採れぬからほんとのことは屬名も確定せぬが、*Tibicen* sp. としても、さう咎められもしない。他にチッチゼミやクサゼミの類も見付かるかと豫期してゐたが、要するに聲も形も經驗せずに終つた。